

## 編集後記

○本学の国文学科では文学部も短期大学部もあれこれの研修旅行が盛行しているのですが、書道専修生の中国研修旅行のみは昨夏中止となってしまいました。世界の人々に衝撃を与えた天安門事件の後遺症によるのです

が、この事件は、社会主義を信奉する国における民主や自由は、官製のレッテルに過ぎないのかという重苦しい想いを抱かされたことでした。そこに起きたのが東欧の激動でした、あの強固なベルリンの壁がもろくも崩壊する様子をTVで直視し、我と我が目を疑ったのでした。そしてペレストロイカとか申す風潮によって、映像で次々と流される東欧の実態は、その映像が虚か実かは判らないながらも、右にせよ左にせよ独裁的政権のおぞましさを伝えてくるものでした。一瞬のうちに崩壊したルーマニアのチアウセスク政権の生々しい最後の姿は、衝撃的でした。自民党政治のぬるま湯に安易にドップリつかりながら、第二次世界大戦後からベトナム戦争ごろまで続いていた社会主義を理想像とする夢を心のどこかで信仰してきた戦後世代に青春を送った人たちにとっては、迷妄からの覚醒とでも申す

べきショックであったと思われます。私なども、正に戦後世代人で、判りもしないままにマルクスやら毛沢東やらを読まされたのですが、さてあれは何だったのだろうかと思うとともに、青春の浪費はそれなりの意味ありと慰めてもいます。

○それはそれとして、天安門事件後の中国も表面的には沈静化してきましたので、書専生の中国研修旅行が実現化しそうな雲行きとなつてまいりました。抑圧されている中国民衆に接しても、その素顔に触れることは不可能かとも思われますが、古くから数多くの異民族に制圧されながらもしたたかに生き続けた漢民族の太古から脈々と伝流している文化は、石などに刻まれた金石文字に冷厳に示されているでしょう。これらには、後人が手を加えることは出来ないはずですから、書道を学ぶ者として、本学の書専生が、そこから数多くのものを十分に味得してきてくれればいいと思うことです。

○平成二年度から本学の学年暦は大幅に改訂されました、前期末試験を七月下旬に設定して、夏休暇によって前期と後期が分割されることになり、授業時間数の関係で入学式も四月四日に繰り上がりました。その結果、学年

始め恒例のオリゼミも本年度は四月六・七・八日の三日間となりました。そのオリゼミ期間の学科行事として、国文学科では鞆の浦の文化遺跡を見学することになりました。福山市周辺の事情に詳しい神田幸男先生の案内で、鞆の浦の古い寺社などを経めぐったのです。弥勒の里の御好意によるバス三台に分乗して鞆の浦に向い、「日東第一形勝」と称された福禅寺の対潮楼から散策を始めました。

平安時代の開基と伝えられる福禅寺にある、朝鮮通信使の使節の接待に必ず使われたと言う対潮楼は元禄年間の建築とのこと、向いに見渡せる弁天島と仙酔島の眺望は、正に絶景でありまして、朝鮮の使節のみならず江戸の文人墨客がその風物を絶賛したのもむべなるかなです。福禅寺の和尚さんの説明は、お経できたえられたか独特の声調を有して音吐朗々、大変に面白く楽しいものでした、和尚さんの大サーブिसで江戸時代のマリヤ観音の厨子も拝見できました。今にも雨が降り出しそうな曇り空でしたので、薄霞に煙ったように見える仙酔島の全景は、和尚さんの説明で一層浮き立つようでした。

○福禅寺から観光用に整備された石畳の小道をたどりながら福山市鞆の浦歴史民俗資料館

に向います。この資料館は室町幕府ころからの靱城跡の小高い丘の上に建っているのですが、そこに至る間の豪壮な民家の姿が歴史を反映して面白いもので、学生諸姉もあちこちと足を止めて眺め入っていました。資料館には鯛網・靱鍛冶・保命酒などの民俗資料や祭りと神事の資料が展示してあり興あるものです。前庭から眺められる眼下の靱の町並みと港、左手の大可島城跡と円福寺の大屋根、右手の小高い山並み、これらは対潮楼からの仙酔島の眺望とは別趣の眺望で、仙酔島が登仙の景とすれば、こちらは民衆の景とでも申しませうか、人の心をなごませる景観でした。

○丘の上から石段を降りて古い町家の間の小道を通り、靱の港に出ます。潮待ちの港であった靱港は天然の良港ですが、今は漁船が多くなったむろする港のようです。突堤に江戸末期建立の大きな常夜燈があつて、右手の古い土蔵が「いろは丸展示館」になっています。これは江戸期に建てられた靱西町の太田氏所有の蔵だそうですが、その中に「いろは丸」探検の次第が展示してあるのです。今から約百二十年前、一八六七年四月に坂本龍馬と海援隊の船「いろは丸」が、衝突で損傷したのを

靱港へ曳航中に宇治島沖で沈没しました。その沈没船を「靱を愛する会」の若い人たちが潜水発見、遺物を多く引き揚げてこの展示館に収容したのです。坂本龍馬のロマン性と靱の町の若い人たちのロマン性とはマッチして、一種の感動を与える展示館になっています。いろは丸グッズ・龍馬グッズも販売しておりまして、結構商売にもなっているようでありました。

○古い商店街を通り抜けて靱の町の北の山際に並んでいる社前前の路次に出ます。時間に制限がありますので、大方の神社は素通りですが、まず数百年の樹齢を誇る天蓋松のある法宣寺に寄りました。正に天蓋のごとき巨松の青緑の葉並みは圧観で、時の流れの重さを実感します。旧い伝説のまつわるささやき橋を渡って（石橋ですが、橋という実感はありません）、太閤秀吉の能舞台のある沼名前神社前も素通りして、安国寺に到着です。

○鎌倉時代文永年間の創建で、南北朝時代に足利尊氏が全国に一寺一塔を建立して、備後の一寺となった安国寺は、盛衰の歴史を繰り返したお寺のようで、今は国重文の釈迦堂が残っているだけです。大正九年に本堂焼失後は廃墟となっていたようで、庫裡は今でも廃

滅寸前の姿を釈迦堂の背後にさらしています。禅宗渡来による唐様建築としては日本最古に属する釈迦堂は、解体修理されて面目を一新しており、本堂跡の脇に発掘され復原修理された枯山水式の蓬萊庭園とともに、安国寺の目玉商品と言ってよいでしょう。その釈迦堂と庭園に対する荒廃した庫裡の対比は、文化財の保存の困難さを人々に訴えているようにも思えます。

○安国寺から海岸通りに出て、歴史と文化遺跡の町並みには不似合いな伸鉄工場の並ぶ路をバスセンターに向い、バスで帰路に着きました。不似合いと申しました伸鉄工場も、靱鍛冶の伝統が生んだもののようで、歴史と産業の共存として理解すべきなのでしょう。こんなことを色々と考えさせてくれる靱の浦見学は、国文学科として大成功だったのではないのでしょうか。遠方から広島の本学に集まってくれた学生諸姉が、日本三景の一つ厳島神社も世界唯一の原爆資料館も見学しないで帰郷してしうということがあるのです。ましてや靱の浦の様子なんて全く知らないままで、広島を去るなんてことは非常に多いはずで、そうした意味でもよかったのではないのでしょうか。古くから瀬戸内交通の要衝として

繁栄してきた柄の浦なのですから当然とは言え、これまで何度も柄の浦を訪れている私でも、こんなに文化遺産が数多くあるとは思っていませんでした。

○十四年間の長い間、本学の国語学の担当をして下さっていた友定賢治先生が、鳴門教育大学に転出されました。田辺健二先生に続いての鳴門への転出で、私どもには一寸ショックでしたが、ともあれ新天地における友定先生の活躍を祈りたいものです。友定先生は、島根大学から大阪教育大学大学院に進まれ、方言学を専攻されておられたのですが、一時は大阪の公立高校に勤務しておられたのを本学にお迎えしたのでした。三十歳前の若い先生でしたが、そして物静かで寡黙な先生でしたが、不思議に学生の中に融け込んでしまわれ、学生諸姉の裏情報にもっとも詳しい先生でした。それも学生諸姉が、先生の人柄に心を許して何もかも打ち明けるということのようでした。校務の方も、教務から広報に至るまで幅広くこなしていただきました。岡山県の新見市の御出身でしたから、岡山県の高等学校訪問は一手に引き受けていただいていたし、昨冬は滋賀県から福井県にわたる高校を私と一緒に回っていただいたことで

した。関西方面での地方試験を実施することでも、この時の友定先生の発言がポイントで発表されたのでした。校務だけではありません。国文学科の雑務一手引き受け処でありました。今では各学科で編集発行され始めた「国文学科必携」も、友定先生の発案で編集されたのでした。友定先生の転出により、何だか大黒柱が無くなったような感覚が国文学科に属する私どもにはあります。そうした校務と雑務に目の回るような日常であったと思うのですが、研究の方も大変な業績を積み重ねておられました。国文学科の恒例行事になっていた老岐島の方言調査でも、山陰から瀬戸内海の方言調査でも、幼児語の研究でも、多方面に重厚な研究論文を精力的に発表してこられました。研究と教育が、先生の中で渾然一体となっていたように思います。先生の本学に残された研究と教育の種子を、私どもは大切にはぐくみ育てていかなければならないと思うことです。今一度、先生の今後の研究の大成を祈りたいと存じます。

○「文教国文学」の第二十四号は、湯之上早苗・曾田文雄両先生の還暦記念特集としましたところ、沢山の執筆者を得ることができて三百頁という大冊となりました。この特集は

大方の好評を得たようですが、さてその反動いかがかと心配していましたが、本号も御覧のように秀れた論稿が集まりました。殊に角重先生の御寄稿は、「文教国文学」に就いて大変うれしいものでした。角重先生の御専攻は日本史ですので、これまで「文教国文学」への御寄稿にためらいが感じられたのでした。幸いにも、私どもの読書会で「道ゆきぶり」を読んでいたのに中世史専門家ということで参加していただき、今川了俊の紀行文を歴史家の目で解釈してみても下さったのでした。そこでは私どもの全く気付かない観点を次々に提示して下さり、「道ゆきぶり」の解釈に新鮮な視点を与えて下さったのです。その読書会の成果の一部をここに提示下されたのですが、これは湯之上早苗先生の諸本攷とともに私どもの読書会の姿の一端が見え始めたわけです。もうずいぶん長い間続いてきた読書会ですが、あれを読み、これを説きで、なかなかその成果を発表し得るということにはなりません。今後は、この読書会の成果も「文教国文学」の誌上に少しは出現するはずであります。皆で揃って一つの仕事ができるということは、志を一にする者として本当に楽しいことであります。

○「文教国文学」には珍しい書評が、本号には掲載されています。親和女子大学の桜井武次郎先生が、下垣内和人先生の『芸備俳諧資料集』Ⅰ・Ⅲ（広島文教女子大学地域文化研究叢書・溪水社刊）について書評して下さいましたのです。下垣内先生のお仕事は、中国地方全般、特に芸備地方の俳壇史の実態について精力的に研究を積み重ねられており、その一つの露頭としてこの叢書が発刊されたのです。本学に地域文化研究所（所長・友久武文先生）が設立されて最初の仕事でもあるのですが、この本は研究所の方向性と下垣内先生の努力との幸福な結合が生み出した結実なのです。そのお仕事の価値については、素人の私どもに十分判らないところもあるのですが、桜井先生の書評によって目を開かされる思いがするのです。本当にありがたいことでもあります。桜井先生の御好意に対して心から感謝申し上げます。今後もうこうした書評がどんどん生み出されるように、それぞれが努力をしたいものであります。そうなれば、「文教国文学」も一層充実発展することになるでしょう。

○平成二年四月三十日（日曜日）の十一時半（この時間設定が、亭主持ちの女性らしい発想と好評でした）、短期大学部国文学科第三回生のクラス会が開かれ、当時のクラス担任

だった大下博子先生と大下先生が結婚退職された後で二年生の時に担任にされていた私の二人に声がかかり出席したことでした。二十名ばかりの妙齢のオバハンたちが集まっております、卒業生のうち半分ぐらいが集合したと話しております。老岐から初めて本学に進学してくれたというので印象深い田町さん（今は姓も変って馬渡さんでした。）も、お母さんのお目付役だというすっかりした中学生の娘さんと一緒に参加していました。カーチャンがズッコケテイルカラと申しておりました。が、幸せな一家の様子が彷彿しております。二十数年ぶりの再会で、学校の先生あり、職業婦人あり、家庭の主婦ありで現況は多彩なのですが、時間は一挙に逆転して青春の一時期の回想に話の華がさいておりました、同じ釜の飯を食った者同志の連帯感のなごみです。この人たちは短期大学の卒業生なのですが、文教国文学会の会費を納入し続けていて、「文教国文学」を読んでいく人々も居ました。大学の消息を「文教国文学」で得ていると申しておりました。こうしてみると、「文教国文学」も裾野がだんだんと着実に拡大しているのだなと実感するのです。私たちの努力目標は、一層的確に射程距離に入ってきているのです。

（文責・横山邦治）

## 文教国文学 第二十五号

平成二年七月一日 印刷  
平成二年七月五日 発行

編集者 広島文教女子大学国文学会  
（非売品）

代 表 湯之上 早苗  
発行所 広島市安佐北区可部東

一丁目二番一号  
広島文教女子大学

国文学研究室内  
広島文教女子大学国文学会  
（振替）広島六―三四八九四

印刷所 溪水社